

J T B グループ労働組合連合会 第 14 回震災復興ボランティア活動レポート

J T B プロモーション労働組合

杉田 大輔

日時：2014 年 5 月 31 日（土）～6 月 1 日（日）

場所：福島県南相馬市小高地区

参加人数：22 名

■活動参加にあたって

私自身、学生時代に岡山県に住んでおり震源地から離れていたものの、阪神大震災を経験していました。そのため東日本大震災は他人事ではないと感じながらも日々、自分の中で風化しつつある事を勝手に復興していると解釈し、何も行動できていない自分がいました。

そんな中、J T B グループ労働組合連合会のボランティア活動案内があり、現地を見て活動したいという思いが強くなり参加を決めました。

この活動レポートを通じて労働組合に所属しているみなさんが再び復興に向け考え、行動するきっかけになれば幸いです。

■活動内容

朝 6 時に仙台の宿泊先を出発し約 2 時間かけて南相馬ボランティアセンターを目指しました。

現地に近付くにつれ、明らかに私たちが日常で見ている風景と変わってくる。今回の活動先の南相馬市小高地区は警戒区域の指定となり、一時的な立ち入り以外は禁止され今でも住民の方々が生活できていない地区になります。

「人が 3 年も生活しないと町はこうも草木で覆われてしまうのか。」
人がいない町、音の無い町はとても寂しく、初めて経験する感覚にしばらく言葉を失いました。



南相馬ボランティアセンターに到着し、松本センター長から今回の活動内容についてのオリエンテーションを受けました。また社会福祉協議会の門馬会長からもお話を聞きました。

「調べれば調べるほど、この町には過去がある。この町を見捨てたくない。」
そんな門馬会長の言葉は未来に向けての決意だと感じました。
そしてセンター長と会長のお二人が私たちに対して、とにかく無理をせず怪我だけはしないように、と心配してくださったのが印象に残りました。

ボランティアセンターからバスで15分程走り作業場所へ到着しました。1日目の作業はビニールハウス2棟の解体となりました。

1分間の黙祷後、参加経験のある連合会幹事の方からビニールハウス解体の流れを説明してもらい作業が始まりました。とは言えビニールハウスの解体をしたことのないメンバーでの作業、そして今回活動した2日間とも真夏日の暑さの中だったため思うように作業が進まず「本当に今日中に終わるのか？」といった焦りもありました。

汗が滴る中、なんとか午後までかかりましたが1棟目の解体が終わりました。このペースだと今日中に2棟目の解体が厳しいと感じる中、早朝からバス移動のため特にコミュニケーションの時間がなかったメンバー同士で1棟目の反省を活かした効率よく作業するための意見交換が自然と起こりました。

役割分担や声掛けがしっかり行われ2棟目は1棟目の半分の時間で解体が出来、無事に時間内で作業を終える事ができました。



夕食での懇親会では何故参加したのか？自分たちの労働組合に戻って今回経験した事を伝えたい、と言った内容でみんなが意見を交換し合い有意義な時間となりました。

活動2日目は昨日とは違うお宅に向かい、この日もビニールハウス2棟の解体をしました。前日の疲れも残っていましたが作業自体はみんなが慣れてきて1日目より少ない時間で解体が出来ました。

作業終了後は再びボランティアセンターへ戻り、使用した道具や自分たちの履いている

長靴をみんなで掃除し合いました。

2日間でビニールハウスを4棟解体した事がどれだけ役に立ったかは分かりませんが、時間内にやりきれた事とみんなで協力し合えた事で参加してよかったと思える達成感は少しあったかと思います。



■今回の活動を通じて

被災された方のご自宅にあるビニールハウスという形ある思い出を解体するといった辛い作業であったが、そんな私たちより辛い思いをされているご自宅の方が2日間とも作業中に顔を出してくださり、お声掛けや差し入れの飲み物まで持ってきてくださいました。

また、ボランティアセンターの松本センター長や門馬会長も、何より私たちの身体を心配くださり声をかけていただきました。

この福島のみなさんの温かい「慈愛」の心に深く感動し、ここで感じた事・見た事を自分達の労働組合員へ伝えなければと強く感じました。

日本の手紙では文末に「ご自愛ください」という言葉を使う事がありますが、この気持ちを被災地に向けて思い・行動することが職場に戻ってきた自分の出来る事だと思います。

最後に以前の参加された方のレポートにも記述がありましたが、今回のボランティアセンターにあった力強い言葉を残して活動レポート報告を終わります。

できる人が、できる時に、できる事をする。

以上